

# Doll Play 場面における幼児の行動の研究\*

星	野		命
古	畑	和	孝
池	田		央
古	畑	と	も
古	佐	伯	孜
古	古	沢	厚
			子

はじめに

## I. 研究の目的

- A. 本研究の狙い
- B. 研究計画にあたって考慮された諸点

## II. 研究の手続

- A. 研究の実施
- B. 被験者と実験・観察者
- C. 行動観察場面の設定
- D. 行動観察基準の決定

## III. 研究の結果と考察

- A. 遊具選択場面における幼児の行動
- B. 行動観察項目相互間の関係
- C. 行動観察結果と観察評定結果との関係
- D. 観察評定相互間の関係
- E. 評定者間の評定の一致度

## IV. まとめ

---

\* 本研究報告は昭和33・34年度文部省科学試験研究費をうけた Doll play technique による幼児の人格診断——家族関係と人格形成の研究」(代表研究者・依田新)を分担して行われた研究の結果の一部をまとめたものである。研究の実施に当っては上記の6名のほか、日本心理学会会員都留伸子氏、国際基督教大学教養学部学生東弘子、松崎裕子、岡林泉の三名の協力があった。園児をお世話下さった都下K保育園の諸先生方に厚くお礼申し上げる。

## はじめに

子どもの *personality* 研究のために、遊びを利用することは極めて有用である。そのことは遊びそのもののもつ積極的意義、並びにその人間発達に対する意味について考えるとき、容易に理解される。<sup>(1)(7)(10)</sup> 子どもにとって遊びは、生活そのものである。子どもが自分の感情を表現し意志を伝えるためには、大人のように言葉や文字によることだけでは充分でない。子どもの場合、それらを補うものとして、動作が生れてくる。その年令が小さければ小さいほど、言語の量・質が不完全になると同時に、動作の意味するところのものは、重要性を増してくるわけである。

子どもは遊びを通して、自然にいろいろな感情や欲求を表出する。また日常の生活経験や対人関係のあり方が、再現されることもしばしばである。現実の世界においては、むしろ子どもの中に抑圧されていたようなものが、遊具を媒体として作り出される想像の世界では、禁止や制約から解放される。そこで子どもはより安全に、楽しく、自由に遊ぶことが可能である。

遊びのこのような性質は、子どもの心理療法において取り上げられ、そして生かされ、遊戯療法 (*play therapy*) として、いろいろの立場から発展してきている。

その治療場面において、*doll play* (*doll* 及び *doll house*) が投影的遊具 (*projective tool*) として役立つことは、*play therapy* の創始者の Freud, A. や Klein, M. によって認められた。また解放療法の創始者の Levy は *doll play* を診断、治療の主なる道具として用いた。彼は父、母、兄弟、赤ん坊からなる標準化された家族人形、家具、積木等の遊具を用いて、子どものもつ欲求不満や葛藤が現われやすいような場面を構成しておいて、そこへ問題をもつ子どもを連れて入ることにより、抑圧された感情の解放・浄化 (*catharsis*) をはかったのである。<sup>(5)</sup>

その他には、*doll play* が、*play therapy* で用いられる多くの遊具の中でも、特に子どもの発言、感情表出をひき出すのにすぐれていることを

(4)  
見出した研究もある。また doll play をしているうちに、doll と現実の人間（自分自身、家族など）との同一視がおこり、その結果、現実の家庭生活、それに伴っている種々の感情の反映・表出がおこなわれ易いことも、認められている。

このように doll play 事態における子どもの行動は、現実の生活における対人的行動を規定している動機体系を反映しているものと考えられるから、他の投影法と同じように doll play を通して、子どもの personality を理解し、把握することができよう。

しかし、遊びの中に表われたものすべてをもって、現実の家族関係などの投影されたものとして解釈することは危険である。子どもの personality とは無関係に表われたある行動をも、誤って、その personality と関係をもったものと評価するおそれがある。また先行経験と doll play 事態での行動との間には、ある一定の関係があるとしても、doll play 事態における子どもの行動から、逆にその子どもの personality を診断し、その家族関係までも直ちに理解することはなかなかむづかしい。

(11)  
また doll play については今まで多くの研究がなされてきてはいるが、日本の子どもに適用したものについては報告が少ない。本研究では doll というものが、日本の子どもに、どのような親しさ、魅力を与え、その興味をつなぐことができるかという点について、doll play の利用上での最初の問題をとりあげて実験を試みたつもりである。

## I 研究の目的

### A. 本研究の狙い

この研究は doll play technique における各種の問題のうち、子どもにとって特徴的、典型的と考えられる他のいくつかの遊具に比して doll がどのように好まれ、選びとられるか、またどのように特徴的な行動を促すかという問題を取りあげ、比較的指示的な遊具選択場面を設定して幼児の言語、動作の特徴を明らかにしようとして行われた。

幼児の行動観察にあたっては、質的臨床的な観察の前段階として、量的

に集計しうるような客観的な行動観察基準と、同時に幼児の態度行動についての全体的な把握を目的とする主観的な評定法を考案して、観察の妥当性、信頼性の検討に役立てることにした。

### **B 研究計画にあたって考慮された諸点**

以上のような目的で研究をすすめるにあたって、具体的にどのような方法で研究の計画を定めたらよいであろうか。その際考慮されなければならないとした点には次のようなものがある。

- 1) 遊具として何を選ぶか
- 2) 選ばれた遊具をどのように配置するか
- 3) 被験者として誰を何人選ぶか
- 4) 実験者として誰を選ぶか、男性か女性か、経験者か未経験者か、毎回同一実験者か、それともかえるか
- 5) 観察者として誰を何人位選ぶか
- 6) 被験者にどのような指示を与えるか
- 7) 観察は一回に何分間行うか
- 8) 被験者は一回だけ実験に参加するか、それとも何回も参加するようにするか
- 9) 観察は何を中心に行うか
- 10) 記録用紙はどのような項目について、どのように記録するか
- 11) 結果をどのような観点より整理するか

以上の諸点について、我々は数回にわたって行われた予備観察の結果を中心に討議したのち、以下のような方法を決定した。

## **II 研究の手続**

### **A. 研究の実施**

この観察は、1959年6月1, 8, 15, 22日の4回にわたり、国際基督教大学教育心理学実験室内の遊戯室及び行動観察室において実施されたものである。

## B. 被験者、実験者及び観察記録者

被験者は都下の私立K保育園園児8名で、性別、年齢、父兄の職業、家族関係は第1表の通りである。観察は bias をさけるため表のような配列にした。

第 1 表

観察順	氏名(頭文字)	性	年 齢	父の職業	家族数	同胞内の位置
1.1	Y. M.	M	5歳6月	高校教員	4人	2人兄妹の長子
1.2	K. A.	M	6:1	会社員	5	3人姉弟の末子
2.1	Y. E.	F	5:11	農 業	6	4人兄妹の末子
2.2	Y. Mi.	F	6:1	公務員	4	2人兄妹の末子
3.1	Y. Y.	M	5:8	会社員	7	1人子
3.2	T. K.	F	5:5	公務員	4	2人兄妹の末子
4.1	Y. S.	F	5:4	工 員	4	2姉妹の末子
4.2	Y. I.	M	5:8	公務員	4	2人兄弟の長子

実験者は4回の観察を通して同一の女子1名がなり、観察記録者は毎回6ないし8名で、さらにタイム・キーパー1名が加わった。

## C. 行動観察場面の設定

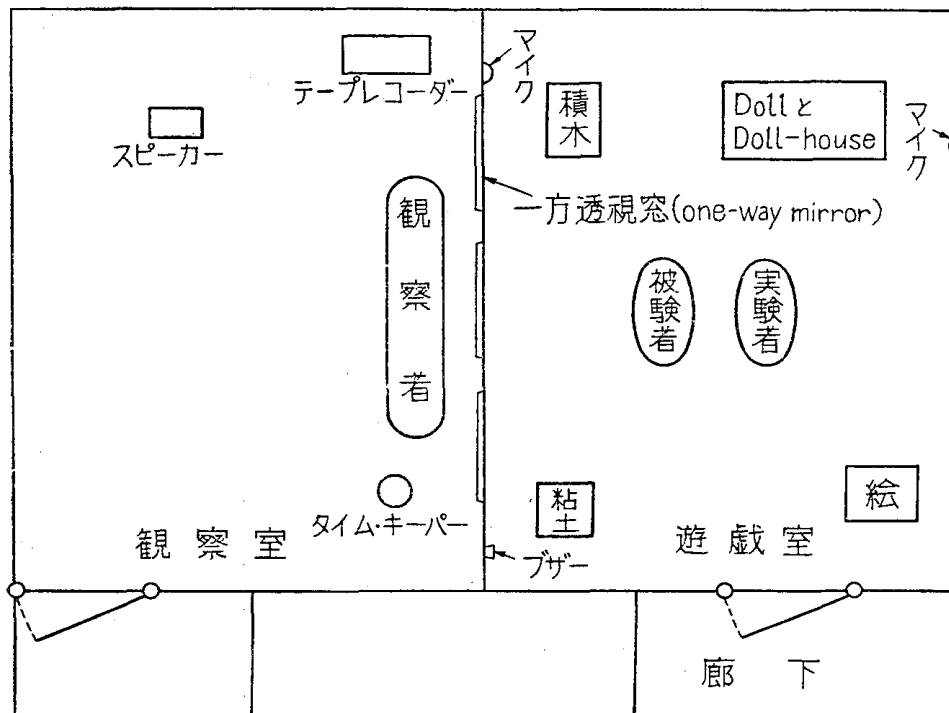
### 1. 観察場面

所定の遊戯室内で4種の遊具のいずれかを用いて遊ぶ場面の観察。

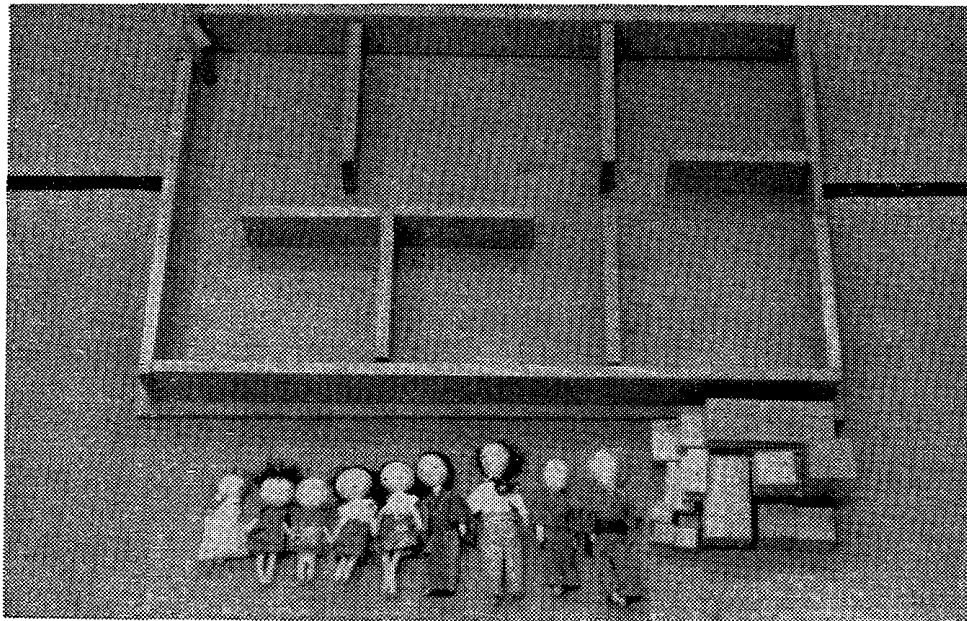
遊戯室内には被験者と実験者各1名が入り、遊具は子どもの家族構成に合わせた doll および doll house\*。積木（着色してあり、車のついた箱中に入っているもの）、絵（クレヨン、画用紙）、粘土の4種を室内のほぼ四隅に配置した。選ばれた道具はいずれも、projective な constructive な行動を誘発するようなものとして考慮された。（第1図）

\* doll は、特定の表情をもたない15~25cmの家族人形。doll house は、70cm×100cmの大きさで6部屋に仕切られ、入口が2つある。特定の家屋構造はもっていない。着色されていない積木が doll house に附随している（写真参照）

第1図 観察室・遊戯室見取図



Doll および Doll House



観察時間は20分である。

実験者は、室内に入ると子どもの靴を脱がせ(床にはじゅうたんの上面にござが敷いてある)部屋の中央に連れていき、ひとあたり遊具を眺めさせる。ついで各遊具について、「これは何?」とたずね、確認させた上、「さあ、こ

のおもちゃのどれを使って何をして遊んでもいいですよ」と指示を与え遊ばせる。実験中は、実験者は相手の行動を方向づけるような指示や発言は一切行わないように注意する。20分経過後ブザーの合図で遊びを打切る。

## 2. 観察方法

防音のほどこされた観察室から 一方透視窓(one-way mirror)を通して観察する。遊戯室内での発言は、室内の2カ所に設置されたマイクを通じてテープレコーダーによって録音されるとともに、増巾器・拡声器を通じて、観察者に普通の音量で伝えられるようになっている。観察室には観察者6～8名とタイム・キーパーが1名いる。

タイム・キーパーは子どもが遊戯室内に入ったときに秒読み(10秒毎)を開始し、実験者が被験者に一応の指示を与えて、「さあ、どれで遊んでもいいですよ」といったとき、「始め」の合図をする。以後20分間各観察者は所定の行動観察記録表(第2図)に観察を記録する。20分経過後、タイム・キーパーは観察室内のブザーを鳴らし、観察者、実験者に合図をする。

観察は、客観的に観察容易な overt behavior のみを行動記録表に記述し、できるだけ主観をまじえない。なお、観察終了後、観察者ならびに実験者は観察評定用紙(第3図)に5段階の評定を行う。

## D. 行動観察基準の決定

### 1. 行動観察記録表

行動観察記録表は第2図のとおりである。被験者の行動は10秒毎にチェックする方法をとり、この観察単位内で2種以上の種類の行動が現われた場合には、どちらか多い方を1つチェックするものとする。観察される項目は次のようなものである。

#### a. どの道具を用いて遊んでいるか。

その道具の種類と持続時間を10秒単位で線をつなぎ明らかにする。

どの遊具にも手を触れていない場合には、「なし」の欄を線でつなぐ。遊具を手にしても、その遊びと関係のない行動、遊具が直接対象

第2図 行動観察記録表

行動観察記録表															
被観察者 観察者		実験者 観察日時		年月日			時分より 時分まで		枚数						
時間	遊具の種類					時間	実験者の働きかけ	遊具			自分自身に向けた行動	けられた行動	室内外の環境に合わせた行動	時間	備考
	粘土	絵	積木	Doll	なし			統合的	心理的	重要な					
30''	○	○	○	○	○	30''		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	30''	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
1'	○	○	○	○	○	1'		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	1'	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
1'30''	○	○	○	○	○	1'30''		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	1'30''	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
2'	○	○	○	○	○	2'		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	2'	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
2'30''	○	○	○	○	○	2'30''		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	2'30''	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
3'	○	○	○	○	○	3'		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	3'	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
3'30''	○	○	○	○	○	3'30''		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	3'30''	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
4'	○	○	○	○	○	4'		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	4'	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
4'30''	○	○	○	○	○	4'30''		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	4'30''	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		
5'	○	○	○	○	○	5'		AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	5'	
	○	○	○	○	○			AVI	AVI	AVI	AVI	AVI	AVI		



になっていない場合には、結んだ線の間切断を入れ、この間は中断状態 (pause) であることを明らかにする。

#### b. 行動の内容

- 1) 統合 (重) 行動の対象が遊具そのものに向けられ、それが統合された段階に達しており、心理学的な意味があると判断される場合。例えば、家族生活を明らかに反映しているような一定の主題をもった情緒的色合いを帯びた行動はこれに含まれる。(non-stereotype, thematic, individualized behavior\*)。
- 2) 統合 行動の対象が遊具そのものに向けられ、構成的、論理的意味をもっている場合。(stereotyped routine behavior, organizational behavior)
- 3) 未統合 行動の対象が遊具に向けられてはいるが、まとまった意味をもつに至っていない場合。(exploratory behavior はこれに近い)
- 4) 自分自身 行動の対象が自分自身に向けられている場合。例えば、「足がいたい」「おなかがすいた」など。
- 5) 環境 行動の対象が室内外の事物・事象に向けられている場合。例えば、「音がするよ、何だろう」「わあ、大きな部屋だ」など。(tangential behavior)

c. 行動の種類 発言を伴うか、動作だけか、実験者との相互作用がみられるかなど。

- 1) A……動作のみで、発言を伴わない場合。
- 2) V……発言のみで、動作を伴わない場合。
- 3) AV……しゃべりながら動作をしている場合。
- 4) VI……発言が実験者に対して向けられ、相互作用のある場合。

\* ( )内はPhillips による行動の分類カテゴリー。彼の分類によるカテゴリーと本研究での分類カテゴリーとの関係が示されている。文献(6), (11) 参照。

第3図 行動観察評定表

観察者		観察日時 年 月 日 時分～ 時分						
実験者		被験者の被観察回数 回目						
被験者		その日の観察順位 回目						
室内での被験者の様子	① 子供の動作	あまり動か ずひとと ろで遊ぶ	方々をどん どんとびま わり活潑	本人の感じ	⑪ 服装, 靴 身なり (経済の 問題)	粗末なも のを身に つけてい る	ぜいたくな 高級品を 身につけ ている	
	② 子供の発言量	黙々とだ ままま遊 ぶ	たえず何 かを物語 っている		⑫ 身体的 発育程 度	身体的発 育不良標 準以下の 感	標準より 背高大で が、	背 高 大 で が 、 ち り
	③ 実験者とのcontact	一人だけ の世界で 遊ぼうと する	実験者を 仲間に引 入れてい っしょに 遊ぼうと する		⑬ 知能程 度	劣らしい	中	優らしい
	④ 実験者に対する意識	どう思わ れている か何かい われな いかた ええ 気にす る	人のおも わくを 気にせ ずのび のびあ そぶ		⑭ 社会的 発育度	いかにも 稚なくて 甘えっ 子の感	年 の わ り に 大 人 び て い る 、 し っ か り の も の	
	⑤ 遊びへの集中力	いろんな 遊具に目 うつりし て没入し ない	一つの遊 具に熱中 してあ そぶ		⑮ 経済状 態	貧困ら しい	豊か らしい	
	⑥ 遊びの統合性	行きあたり ばったりの 思いつき	秩序だ った計画 性		⑯ 親の教 育度	放任	教育熱 心	面倒の みすぎ
実験者の様子	⑦ 遊びに対する指示	放任のし すぎ	干渉誘導 のしすぎ	家庭状況の推測	⑰ 家庭の つけ	放任	厳格	
	⑧ 質問量 (遊びの 認識のた めの問い かけ)	少なすぎ る、もう 少し話 しかけて よ	多すぎる 、あまり 問はず すぎる		⑱ 子供 の求	何をい って拒 否され る	何でも 通る あま やか さ れる	
	⑨ ラポール	親しさが 足りない で子供の 思うこ とが出 ていない	あまり慣 れ親し んで子 どもの 行動に ゆがみ のおそ れあり		⑲ 家庭 内の気 雰囲気	冷たくな ごやか でない 淋しい 感じ	明るくな ごやか であ たか い感 じ	
被験者	⑩ 服装, 髪 身なり (態度の 問題)	不潔な感 じ手入れ 不足	さっぱり した、 きちん とした 清潔 さ	【評定上の注意】 1. 評定は5段階法を用いる、ここでは 両極端の内容しか書いてないが、中央 の線は normal で両はじに進むにつれ				

- 「やや……である」「非常に……である」の形容がつく。
- 5段階の線のどれにも属さず中間だと思われる場合は、中間線上に0をつけてよい。普通は5段階の切断線のどれかを○でかこむ。

5) A I ……黙ったまま、実験者との共同作業が行われている場合。

6) A V I ……実験者と共同して、しゃべりながら行動している場合。

#### d. 実験者からの働きかけ

実験者から何らかの形で働きかけた場合には、所定欄に矢印(→)を附してそれを示す。

#### e. 備考欄

具体的な発言内容や行動を、時間の許す範囲内で適宜記入する。

#### f. その他

1) 記述は10秒単位で行う。その時間内の最も代表的な行動をとりあげる。

3) 本観察はタイム・キーパーの指示により正味20分間行うが、観察用紙には子どもの入室直後から記録をはじめ、指示のための時間も明らかにする。また、本観察終了後も子どもが遊戯室を出るまで観察を継続する。

## 2. 行動評定項目

実験観察が終ったあと、各観察者はその観察を通じてうけた子どもの印象を評定記録表に評定記入する。行動観察記録が、人間の行動を細分化し、結果的にはそれを単純和してその人の行動特性を記述しようとする行き方に対して、これは、子どもの全体的な行動の特徴を大づかみにするためのものである。項目は全部で21項目で、5段階評定をするようになっている。

① 子どもの動作 その子どもの活動度 (activity level) で、たとえ遊具の種類は少くても、どんどん部屋の中をとびまわって遊ぶのか、一カ所に坐りこんだまま動きが少なく遊ぶかの評定である。発言量や遊具の種類との関係が調べられる。

② 子どもの発言量 言葉数が多いか無口かの評定で、あとで、数

量的に出された verbal behavior と関係づけられる。

- ③ 実験者との contact できるだけ実験者と一緒に遊ぼうとするか、自分だけで遊ぼうとするかのちがいのことで、社交性の質の目やすと考えられよう。一人で遊ぶからといって自立性があるとかないとかをみようとするのではなく、外向的か内向的かをみようとするものである。
- ④ 実験者に対する意識 これも社交性のあるなしに多少関係があるかも知れないが、力点は人を非常に気にするか、しないかにおかれる。たえずちらちらと実験者の様子をうかがったり、何か言われはしないかとおずおずしたりしているか、或いは全く逆に、おおらかであるかのちがいである。家庭のしつけと関係があろう。
- ⑤ 遊びへの集中力 子どもがその遊びの中にどの位没入しているかの度合をみるものである。一つの遊具にうちこめるか、ただ表面的に遊んでいるか、或いは、一つのものだけに熱中するか他のものに目うつりばかりしているかをみるものである。
- ⑥ 遊びの統合性 その遊びにどれだけの一貫性があるかで、知能に関係するものとみる。一つの物語を作って遊ぶか、ただふれてみるだけかのちがいである。
- ⑦ 遊びに対する指示 実験者の指示を毎回一定にするための項目で、遊びに対する指示が誘導的にすぎて遊びを無理に一つの方向にもって行ってしまったのではないかどうかの反省である。
- ⑧ 質問量 質問しすぎたために、子どもはそれほど考えていなかったのに無理に答えたり、あとから物語をつけて合理化していたのではないかとの反省である。
- ⑨ ラポール 全体的にラポールが足りないとか、或いは、ありすぎて相互作用 (interaction) が他の子どもに比べて出すぎてしまう危険を防ぐためのものである。
- ⑩ 服装・髪・身なり 主として身なりがきちんとしているかどうか

かで、家庭のしつけ、育児の様子を知ろうとするものである。服は粗末でも手入れが行きとどいていれば、親は子どもの面倒をよくみていると想像できる。

- ⑪ 服装・靴・身なり 主として家庭の経済状態を判断するためのものである。
- ⑫ 身体的発育程度 身体的発育が標準より大と考えられるか、小と考えられるかで観察者の子どもの認識の程度も分る。
- ⑬ 知能程度 遊びの内容から、相当知能が高いか、低いかを判断する。これも比較的規準がはっきりしているから観察者の判断の妥当性が検証される。
- ⑭ 社会的発育度 甘えっ子であったり、子どもっぽく、見た感じが年のわりにいかにも幼稚であるか、あるいはその逆で、お兄さんの、お姉さんのであるか、もう小学生なみであるか、などの違いである。
- ⑮ 経済状態 以下は憶測の度が強くなるが、服装や態度、遊びの内容等から判断して、家の経済状態についての判断をする。
- ⑯ 親の教育態度 親が子どもの面倒をよくみているか、放任しているかを判断する。服装もきちんと手入れしてあればそれも参考になろう。保母さんに父兄会その他によく出てくるかどうかなどを尋ねると参考になる検証資料が得られよう。
- ⑰ 家庭のしつけ しつけが家庭でどの位きちんとなされているか、靴の脱ぎ方、遊具のしまい方、実験者に対する態度等から判断する。極度に実験者を気にしたりすれば、しつけがきびし過ぎるか、口やかまし過ぎるか、そのようなところに原因があるかも知れない。
- ⑱ 子供の自立性 人が手伝わなければできないか、人からいわれないでも自分でどんどんかたづけたり、靴を脱いだりできるかなどが判断の材料である。

- ⑱ 子供の要求 家ではどんな要求でも通るか、買いたいものはすぐ買って貰えるか、その反対か、判断がむづかしいが、言動や遊びの内容から判断する。
- ⑳ 家庭内の雰囲気 家庭が明るく、暖かく、なごやかで楽しいか、あるいはその逆に何かしら冷めたいところがあり、両親の仲がうまく行っていないのではないか、子どもはとりのこされているのではないか、そういう感じがするかどうかである。これも言動や遊びの内容から総合的に判断する。
- ㉑ 子供の適応 子供自身は家でうまく行っているか、幸福感にみちているか、又たえず要求不満や不安におびやかされているか、これも総合的に判断する。

### III. 研究の結果と考察

#### A. 遊具選択場面における幼児の行動

##### 1. 資料整理のための手続

##### a 各被験者についての行動観察記録決定版の作成

観察は毎回6ないし8名の観察者によってなされているので、各被験者について6ないし8通りの観察記録がとられている。ここでは幼児にとってどんな遊具が好まれるか、そしてどんな行動を表わすかという点について調べることが目的であったので観察者間の相違は一応考慮に入れないで各被験者についての客観的な信頼しうる記録が必要とされた。そのため、観察者間の一致度については後に検討するものとして、まず、記録の決定版を作成した。決定版は各観察者の観察記録に基き、観察中同時にとられた録音テープを聴取しながら、観察者、実験者間の討議を経て、ひとつの行動観察記録の形に作られた。

##### b 遊具についての諸データの算出

各被験者毎に、4つの遊具についてそれがどのように選ばれたか、その使用時間、行動の種類、行動の内容の量を10秒を1単位として算出した。

##### c 遊具間諸データの分散分析

bにおいて算出された諸データをもって、4遊具間の選択の度合、行動の内容を明らかにするために順位によるWテスト<sup>(8)(9)</sup>を施した。これは、4遊具についてのデータにはそれぞれ、各被験者のもつ特徴ある反応が含まれており、したがって個人間の変動と個人内での遊具間の変動とが問題となってくるためである。このテストは一般に一致係数 (coefficient of concordance) といわれ、少数例の順位による分散分析に用いられるものである。

## 2. 結果とその考察

第2表 4遊具と幼児の行動との関係

遊具	使用単位 時間10秒		内 容		統合度	種 類					言 語 表 出 度	相 互 作 用 度
	総 量	%	統 合	未 統 合	統 合 量 総 量	A	V I	A V	A I	A V I	VI+AV +AVI	VI+AI +AVI
											総 量	総 量
粘土	73	7.9	42	31	57.5	32	2	26	4	9	50.6	35.7
絵	144	15.6	123	21	85.5	98	5	13	7	21	27.1	16.3
積木	411	44.7	353	58	86.0	305	5	39	21	41	20.6	22.9
doll	292	31.7	227	65	77.8	86	12	102	9	83	67.5	20.6

第2表は8名の被験者について、遊具使用時間、その遊びの内容、行動の種類などをまとめたものである。個人間の変動をも考慮に入れながら、遊具の被選択性と行動の特徴をみていくと次のような結果がえられた。

### a. どの遊具を使って遊ぶことが多いか

遊具の使用時間についてみると、積木、doll、絵、粘土の順に多い。この関係は一致係数では $W = .258$ でカイ二乗検定の結果、有意なものではない。すなわち、遊具がどのように使用されたかをその使用時間からみると個人間の変動が大きく、いちがいにある順序でこれらの遊具に選択の誘引価値があるとはいい難かった。たとえば、被験児Y.Y.は、積木1170秒、doll 30秒、絵、粘土は選択なしという結果であるが、被験児Y.I.は、doll 950秒、粘土180秒、絵10秒、積木は選択なしという結果である。

次に被験児がどの遊具から遊びはじめるかに注意すると、第3表のよう

な結果を得ている。実験者が4遊具のひとつ通りの提示をすませて、「さあ、どれを使って何をして遊んでもいいですよ」と指示した後、第1に選択されたもの、第2、第3にとり上げられた遊具と、それを選択した被験者の数が示されているが、第1選択では積木が3人の被験者に選ばれている。第2選択まで考えると、dollを選んだものが8人中6人おり、積木は4人、粘土4人、絵2人となっている。全時間中、8人の被験者に一度も選ばれなかった遊具はなく、4遊具は一応幼児の選択の対象にはなっていた。ただ幼児によっては session の間一度も手をふれなかった遊具がある。絵、あるいは粘土を選ばなかった子が8人中3人ずつあり、積木には2人、dollに1人いた。遊具移動数は1から4までであるが20分のうちにある遊具

第3表 遊具選択の順位と、選択を行った被験者の数

1 番目に 選んだ人数		2 番目に 選んだ人数		3 番目に 選んだ人数		4 番目に 選んだ人数		1 回も選ばなかつ た人数	
積木	3	Doll	4	絵	3	粘土	1	Doll	1
Doll	2	粘土	2	Doll	1	積木	1	積木	2
粘土	2	積木	1	積木	1			絵	3
絵	1	絵	1					粘土	3

から、他の遊具へとうつったケース（遊具移行数は1）が一番多い。ただし粘土、絵、積木は、保育園児にとっては比較的親しまれている材料であるが、ここで用いられた doll が一般の幼児にとってはむしろ珍しい種類のものであったことは一応考慮されるべき点であろう。

#### b. 統合性のある遊びのみられるのはどの遊具を用いるときか

遊具毎について遊びの統合、非統合の量から、統合度をとってみると、積木遊び、絵の遊びは粘土遊びよりも高いようにみうけられた。doll については明らかではない。このことは、積木や絵は材料があればすぐに一応まとまった遊びになりやすいが、doll や粘土ではひとつのまとまったものとして主題を見つけるのが難しいという点にあるのではないかと考えられる。一致係数からみると  $W=.159$  であり有意ではない。

遊びの中において、日常のきまりきった行動でなく、家庭生活を反映す



るような、その被験児に限ってみられる行動とか、一定の主題をもった行動、情緒的色合いを帯びた行動など、いわゆる心理学的に重要な意味があると思われる統合的な行動は、この8人の被験児については殆どみられなかった。被験児 Y. I. が doll を用いたときに、わずかにみせたにすぎない。幼児の行動の診断に用いられうるような意味ある行動は、このような非統制的な場面でのただ1回の観察ではみわけにくいものと考えられるが、doll においてその可能性がいくらかあるのではないかと期待される。

#### c. 言語表出度を多くさせる遊具は何か

言語表出度は doll, 粘土, 絵, 積木の順に多くみられた, 統合度が比較的高く, 使用時間も長い積木遊びと, 統合度の比較的低かった doll play の間には, 相当大きな差があるように思われる。一致係数については  $W = .125$  であり, この順序は必ずしも有意ではない。この結果からでは, はっきりしたことは分らないが, 遊具によってはその使用時間にかかわらず, 言語表出を促すものがあるのではないかとと思われる。遊具に伴う言語表出についての他の研究でも, このことが指摘されている。<sup>(4)</sup>

#### d. 実験者との相互作用はどの遊具での遊びのときに多いか

相互作用は粘土, 積木, doll, 絵の順に大きいが, 個人間変動を考慮すると,  $W = .187$  でその一致度は有意なものではない。

以上4つの遊具について, 幼児に好まれる度合, 誘発される行動の種類などを結果とともに検討してきたが, 個人差が大きいためここからでは一般的結論は導き出し難い。doll play についていえば, ここで用いられた他の3つの遊具にくらべて, 比較的興味をもたれ, 早く選ばれること, 統合的な遊びには入らないことがあっても, 言語表出の機会が比較的多いことが見出された。このことは, 幼児の人格診断, 人格形成の諸因子の手がかりを遊びの行動の観察そのものからとらえるのみならず, 幼児の充分でない言語活動をより活潑にしていくという点で, 幼児を理解する1つの有効な方法を示しているものではないかと考えられる。

### B. 行動観察項目相互間の関係

## 1. 手続

行動観察記録から遊具間の差を一応考慮の外においたばあい、幼児の行動にどのような特徴がみとめられるか。この点について明らかにするために、行動観察記録の各項目についてその相互相関を求めることにした。先ず18の項目について各被験者の行動特性に順位をつけ、それによって各項目相互の順位相関を求めた。有意性の検定を行い相互相関の明らかに示されるものを表にした。<sup>(2)(3)</sup>

表中、順位相関が、5%水準で統計的に有意であるためには（母順位相関=0の帰無仮説が捨てられるためには）、得られた相関が、絶対値で0.6以上でなくてはならない。したがってそれ以下の相関は考察の範囲から除外した。0.6以上の相関が得られたものについては0.6~0.7のとき $\circ$ 、0.7~0.8のとき $\circ\circ$ 、0.8~0.9のとき $\circ\circ$ 、0.9以上 $\circ\circ\circ$ 、また、 $-0.6\sim-0.7$ のとき $\times$ 、 $-0.7\sim-0.8$ のとき $\times\times$ 、 $-0.8\sim-0.9$ のとき $\times\times\times$ 、 $-0.9$ 以下のとき $\times\times\times\times$ の記号で表わしてある。もっとくわしい値（0.65などと）を示さなかったのは、2桁以上のくわしい数値を出しても、意味がないばかりか、そのような差を考慮に入れて表を読むことはかえって有害だと思われたからである。

## 2. 結果

各行動観察項目間の相互相関の結果は第4表で示すとおりである。この表をもとにして、4遊具についてのいくつかの項目の相互相関算出の結果を参照しながらみていくと、次のようないくつかの点がみいだされる。

a. 各遊具の移行回数が多い被験児は、遊びの内容の未統合さと関係し、言語表出や、実験者との相互作用度が高くなっている。したがって AVI（遊びながら実験者に質問したり、話したりする）や VI（遊びに関係なく実験者と話す）の量との間に有意の相関があり、A（ただ黙って遊んでいる）とは負の相関を示す。使用遊具数は当然多くなっている。

b. 言語表出度、相互作用度、AV、AVIの間には相互に有意な高い相関がある。実験者の働きかけの回数がAI（遊びながらことばには出さな

第4表 行動観察項目相互間の順位相関算出結果

行動観察項目	1 説明時間	2 遊具使用時間	3 遊びの統合+統合(重)	4 未統合+自己+環境	5 統合度	6 A	7 VI	8 AV	9 AI	10 AVI	11 言語表出度	12 相互作用度	13 実験者の働きかけ	14 なしの行動時間	15 休止時間	16 使用遊具数	17 各遊具移行回数	18 実験終了後継続時間
1 説明時間	/														×			××
2 遊具使用時間		/																
3 遊びの統合+統合(心理的に重要)			/	××	°°	×											×	
4 遊びの自己に向けられた行動+環境にむけられた行動				/		°°										°°	°°	
5 統合度 = $\frac{(3)}{(2)} \times 100$					/	×										×	×	
6 A						/	××	××	××	××	××	××						××
7 VI							/		°								°°	°
8 AV								/	°°	°°	°°							
9 AI									/		°°							
10 AVI										/	°°	°°				°	°°	
11 言語表出度 = $\frac{VI+AV+AVI}{A+VI+AV+AI+AVI} \times 100$											/	°°					°°	
12 相互作用度 = $\frac{VI+AI+AVI}{A+VI+AV+AI+AVI} \times 100$												/				°	°°	
13 実験者の働きかけの回数													/					
14 なしの行動時間														/				
15 休止時間															/			°°
16 使用遊具数																/	°°	
17 各遊具移行回数																	/	
18 実験終了後継続時間																		/

(注) °°, .9以上, °°.8~.9, °°.7~.8, °.6~.7, ×—.6~—.7, ××—.7~—.8, ××—.8~—.9, ××—.9以下

いが実験者と contact をもとうとする。たとえば、実験者の顔をちらりとみる、実験者と一緒に遊ぶなど）とのみしか相関を示さないことから考えると、言語表出度と相互作用度との相関は被験児の方から起されている行動に基づいているのではないかと考えられる。しかし遊具別にみていくと、少し異なった点も見出された。言語表出度と相互作用度は全体としては有意な相関があるが第5表にみられるように、doll の場合にのみ有意な相関があり、その他の場合は明らかではない。相互作用度が実験者の働きかけと関係しているのは絵の場合のみである。このような非指示的な場面では、doll play の場合には実験者との関係が比較的良好に保たれ、また言語表出が伴ってくるのではないかとと思われる（第5表）。

第5表 遊具別にみた言語表出と他の行動との順位相関

	言語表出度との順位相関			相互作用度と実験者の働きかけとの順位相関
	統合度	相互作用度	実験者の働きかけ	
Doll	-.50	.75*	-.60	-.33
絵	-.80*	.00	-.18	.83*
粘土	-.40	-.20	-.45	.05
積木	-.16	.60	-.26	-.31

\* 5%水準で有意な順位相関係数は、doll  $\rho \geq .68$ , 絵  $\rho \geq .80$ , 粘土  $\rho = 1.00$ , 積木  $\rho \geq .77$

c. AI の多い被験者に対しては実験者からの働きかけが多くみられる。実験場面は比較的非指示的な状況に保たれるように配慮されていたが、実験者の側に診断の手がかりとなるような幼児の行動を少しでも多くひき出そうと努力した態度が、この結果に表われたものと考えられる。

d. A の多い被験者すなわち黙ったままで遊ぶ子は、当然のことながらAV, AVI, 言語表出度, 相互作用度とは有意に負の相関を示す。

e. 統合と未統合, 統合度と未統合には、当然のことながら高い負の相関がみられた（1%水準で有意）。

### C. 行動観察結果と観察評定結果との関係

## 1. 手続

次に、10秒単位に細分化された観察用紙による行動観察結果は、全体的な観察からとらえられた評定の結果とどういう関係をもつかが検討された。行動観察結果については、すでに述べた通り整理され、各項目について各被験者の順位づけが行なわれた。また、各被験者についての5段階による行動評定の結果をもちより、それを21個の各項目について単純合計平均し、その平均値の高いものから順位づけた。

各評定者の5段階値をそのまま合計してよいかどうかは問題であるが、

(1) 評定者の研究歴のちがいによって、ウェイトを考慮するほどの積極的な基準を持たないこと

(2) 評定者の性格による、評定の一貫した甘さ、辛さは、順位に直すとき影響をうけないこと

の二つの理由から、単純合計の平均値の順位を最終資料にとることにした。

## 2. 結果

結果は第6表の通りである。この表をもとにして観察項目と評定項目の間にみられる関係を列挙すると、

a. 遊具の使用時間の長いものは遊具への集中力が高いと評定される(0.7以上の相関)。

b. 遊具の使用時間の長いものはそれだけ実験者が遊びに対して指示し過ぎたと評定されている。(0.9以上の相関)しかし、事実実験者が多く働きかけているかどうか、観察結果18「実験者の働きかけ」の項と比べてみても、それを裏書きするような結果は出ていない。また「実験者との相互作用」の項と比べてみても同様である。

c. 統合の時間の長いものは、評定結果の方でも統合性あり(項目6)と判断されている。また、未統合の時間の長いものは、評定結果の方でも統合性なし、遊具への集中力なし、と判断されていて、この意味で観察結果の妥当なことが示されている。けれども統合度は必ずしも評定結果で統合性ありと評定される index になっていない。

第6表 行動観察項目と行動観察評定項目間の順位相関算出結果

行動観察項目 \ 行動観察評定項目	1 室内での被験者の動作	2 室内での被験者の発言量	3 実験者との接触	4 実験者に対する意識	5 遊びへの集中力	6 遊びの統合性
1 説明時間						
2 遊具使用時間					°°	
3 遊びの統合+統合 (心理的に重要)			×			°
4 遊びの未統合+自己にむけられた行動+環境にむけられた行動			°		×	×
5 統合度 = $\frac{(3)}{(2)} \times 100$			×			
6 A	×× ××	×× ××	×× ×			
7 VI						
8 AV	°°	°°		°°		
9 AI						
10 AVI	°°	°°	°°			
11 言語表出度 = $\frac{VI+AV+AVI}{A+VI+AV+AI+AVI} \times 100$	°°	°°	°°			
12 相互作用度 = $\frac{VI+AI+AVI}{A+VI+AV+AI+AVI} \times 100$	°°	°°	°°			
13 実験者の働きかけの回数						
14 なしの行動時間					××	
15 ポーズの時間						
16 使用道具数	°		°°			
17 各遊具移行回数	°°	°°	°°			
18 実験終了後継続時間						

(注) °°: 0.9以上, °: 0.8~.9, °°: 0.7~.8, °: 0.6~.7

7 実験者の遊びに対する指示	8 実験者の質問量	9 実験者とのラポール	10 被験者の身なりの清潔さ	11 被験者の服装の良さ(経済的)	12 身体的発育の程度	13 知能程度	14 社会的発育度	15 家庭の経済状況	16 親の教育態度	17 家庭のしつけ	18 自立性	19 家庭での要求のうけ入れられ方	20 家庭内の雰囲気	21 子供の適応	評定不一致の被験者
			×	xx xx				×	xx	×		×			
oo															o
															oo
															×
															o
						×						xx xx	×		
	oo		o			o		oo	oo	o					
						o	oo						oo	oo	
		×		×								xx	×	×	
													oo		
						oo	oo						oo	oo	
						oo							o	o	
		×		×	×							×			
xx x															×
													.		
						o									
	o								oo						

x—.6~.7, xx—.7~.9, xxx—.9以上

- d. 統合度の **index** は全体的にあっては評価項目の各々とあまり関連性がない。わずかに評価項目3の「実験者との接触」の度合と、**negative** の相関がみられるが、その意味はあまり明確でない。
- e. Aの行動の多い被験者は、評価項目1の「動作性」に乏しいと判定されるし (0.9以上の相関)、発言量は少く (0.9以上の相関)、「実験者との接触」も乏しいと判定される (0.8以上の相関)。このことは、「Aの時間」という **measure** の信頼性を保証するものである。
- f. Aの行動の多い被験者は評価に特徴ある傾向をみせる。そのような被験者は、知能も低く、家庭内の雰囲気は冷たく (0.9以上の相関)、適応もうまくいっていないのではないかと推測され易い。このことは被験者の評価者に対する印象づけの特徴として特に重要なものと考えられる。
- g. VIの多い被験者は、身なりが清潔で、知能も高く家の経済も比較的豊かで、親の教育態度、しつけもきちんとしていると評価され易い、特に家の経済や教育態度しつけと関連のみられるのはこの行動特性に関するのみである。
- h. その逆に AIの多い被験者は家庭内での要求もあまり満たされず、雰囲気も冷たく、適応もよくないと評価され易い。
- i. AVIの多い被験者は動作も活発で、発言量も多く、実験者との接触も多いと評価され、その **measure** が、主観的にも正しくうけとられていることが示されている。
- j. 言語表出度の **index** の妥当性は主観的な評価項目2の発言量との関連でたしかめられる (0.9以上の相関)。
- k. 言語表出度の高い被験者は、また動作も活発で、実験者との接触も高いと評価される、言語表出度は、子供の動作、たとえば遊具間の移行回数や、実験者との接触、即ち、相互作用度と高い関連性をもつ事実からこのことはうなづける。
- l. 相互作用度の **index** は評価項目3の「実験者との接触」の度合からその妥当性がたしかめられる、結果は0.7以上の相関がみられた。また同



時にこれは被験者の発言量が多くなることを意味し、したがって、評定項目2「発言量」とも高い相関をもつ(0.8以上)。

m. 相互作用度の高い被験者はまた、知能も高く、家庭での雰囲気も暖かく、適応もよいと評定され易い。このことは被験者をみる評定者の bias を考える上に興味ある事実である。

n. 実験者の働きかけの多い被験者はどういうわけか、実験者とのラポールが低いと評定されている。また、身体的発育もおそいと評定されている。これは実験者の側からの働きかけのみで被験者の自発的な行動は含まれていない。したがって、自然被験者も頼りなく思われ、そのような設定傾向をもつようになったのかも知れないが、その事情は明らかではない。

o. 何も遊具を使用していない時間の多い被験者はそれだけ遊具への集中力がないはずである。評定項目5の「集中力」の度合とは事実相関が高く0.7以上である。また何も遊具を使用しない被験者には、実験者がもっと指示してもよいと判定され易いのは自然の傾向であろう。評定項目7とは事実相関が高く0.8以上である。

p. 遊具使用中、一時遊びが中断し、それと関係のない行動をしている被験者がそれだけ集中力も統合性も少くなるのではないかと想像される。しかし、これらの項目とは、特別の関連性はなかった。止休 pause の長さは他のいかなる項目ともみるべき関連性がなく有効な index とはなり得ない。

q. 使用遊具数の多少は遊具の数も少いせいかわかり有効な index とは考えられない。例えば使用遊具数の多い被験者はそれだけ集中力も少く、統合度も低いと判断されるのではないかと考えられるが、顕著な結果は得られていない。ただ子供の動作の活発さと、実験者との接触度と関連性がみられるが、それは次の移行回数との関連において考えた方が都合がよい。

r. 使用遊具移行回数は、1つの遊具からまた他の遊具をへて、もとの遊具にかえた場合、別個に計算する点で使用遊具数と異っている。この index の方が、幼児の動作の活発さや、遊具への集中力、統合性等をみるのによ

り有効な index になるのではないかと想像されたが、得られた結果は、幼児の動作の活発さとは 0.8 以上の相関であった。また、このような幼児は発言量も多く、実験者との接触も高い。したがってこれらの評定順位とも高い一致を示している。しかしこれは遊具への集中力や統合性の評定と関連をもつまでにはいたっていない。けれども客観的な観察結果をもとにした各 index とはどれとも比較的高い相関をもち、例えば統合度の index の低いものは事実移行回数も多くなっている。

s. 実験終了後継続時間の長いものは、なお室内にとどまって遊具のかたづけなどに時間を多く費したのであり、そのような被験者はそれだけ遊具に強い興味をもち、集中力も高いと評定されたのではないかと想像される。しかしそれを証明するに十分な結果は得られていない。ただ親の教育態度のよさと高い関連があるのは、そのような幼児は一般にかたづけに多くの時間をとられたがために 実験終了後継続時間 が長くなり、その結果評定も、しつけがよい、親の教育態度がよい、という評定傾向になったのではなからうか。

以上の結果をまとめてみると言語表出度、相互作用度など多くの観察記録された行動の index は、主観的な評定結果と高い相関をもつことが示された。しかしこのような index は、幼児の知能や社会的発育度、家庭内の状況等の適切な推測までを可能にするものではなかった。

#### D. 観察評定相互間の関係

##### 1. 手続

すでに述べたように主観的に評定された行動評定記録の各項目については各被験者に順位がつけられたが、それによって、観察評定の項目相互の順位相関が求められた。

##### 2. 結果

第7表がその結果である。この表により、評定者はどのような項目について共通の評定をし易いかその評定傾向をみることができる。その結果を列挙すると以下の通りである。

- a. 動作が活発で発言量も多い被験者は、知能が高く、社会的発育度も高く、家庭内の雰囲気も暖かく、適応も良いと判断される傾向がある。
- b. 実験者を意識せず、のびのびと行動すると判断される被験者は、家庭内の雰囲気も暖かく、適応も良いと判断される傾向がある。また、事実試みに日常行動における依存性の強さについて父兄に尋ねた質問紙\* によってもそのような幼児は依存性が低いことが示されている。
- c. 10から21に至るまでの評定項目には、全く楽観的な推測によって評定され易い項目が多い。したがってそのような評定項目は被験者のもつ何か特徴的な印象をもとにして、すべて評定されるのではないかと考えられる。その結果、各評定項目の間に評定値の差がなくなり、どの項目についても同じような場所に check されるようになる。これは評定項目10から21までの66ヶの相関の組合わせのうち、半分以上の34ヶの組合わせについて、有意の相関がみられている事実から明らかである。そのような評定をうける被験者の特徴的な印象が何であるかははっきりとつかめないが、外部から比較的容易に判断されると考えられる被験者の身なりの清潔さ、あるいは行動の活発さ、発言量の多さ、実験者との接触の多さなどが関係するのではないかと考えられる。これらの値の大きいものは、知能も高く、社会的発育もよく、家の経済も豊かで、親の教育態度や家庭のしつけもきちんとしており、自己の要求も十分満たされると考えられ易く、さらに家庭内の雰囲気も暖かで、子供は *well-adjusted* であると判断され易いようである。しかし、これは必ずしも事実と合致しているわけではない。たまたま実験室に連れて来られたとき、よい服装をしていたからといって、家庭が豊かであるとは限らない。別に家庭状況を調べた資料などからこのことが明らかにされた。

\*この質問紙は、この研究の一部として考案され、使用されたものであるが、今回の報告では割愛した。実施結果の一部は第2回教育心理学会大会（1960年10月）で報告された。

依田新，古畑和孝，神保信一，池田央，「幼児における依存性尺度の作成とそれによる研究」

第7表 行動観察評定項目順位相関算出結果

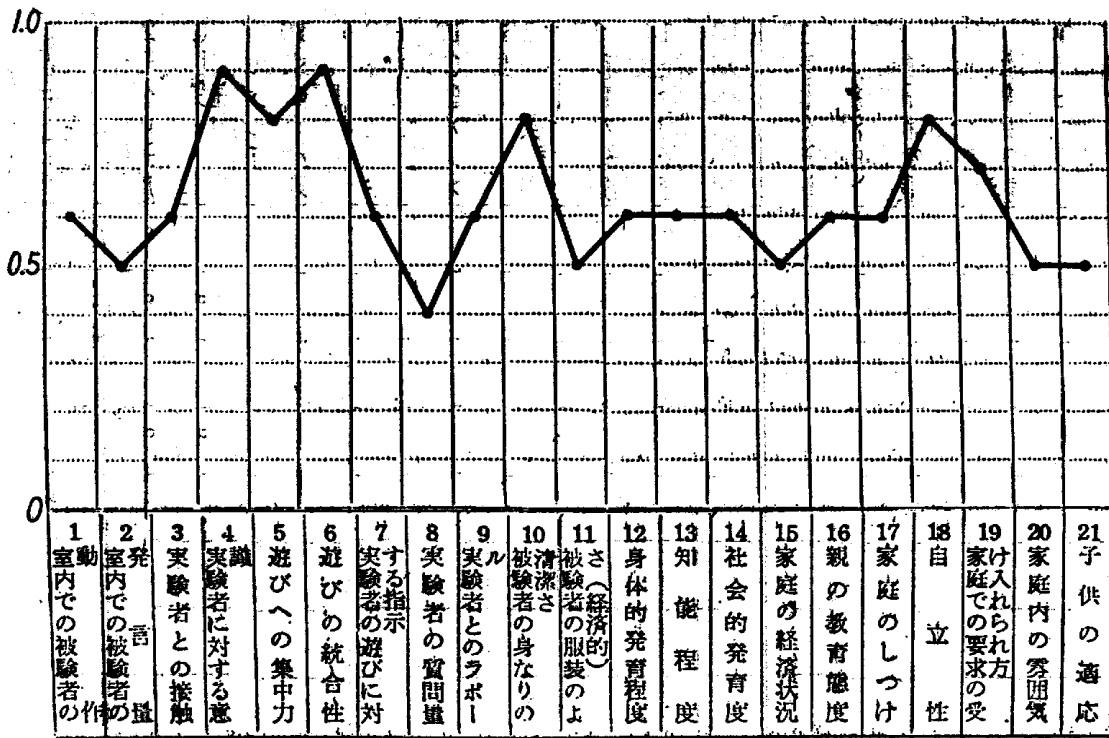
行動観察 評定項目	1 室内での被 験者の動作	2 室内での被 験者の発言 量	3 実験者との 接触	4 実験者に対 する意識	5 遊びへの集 中力	6 遊びの統合 性	7 遊びに対する 指示
1 室内での被験者の動作	/	∞	。				
2 室内での被験者の発言量		/	∞				
3 実験者との接触			/				
4 実験者に対する意識				/		∞	
5 遊びへの集中力					/	。	∞
6 遊びの統合性						/	
7 実験者の遊びに対する指示							/
8 実験者の質問量							
9 実験者とのラポール							
10 被験者の身なりの清潔さ							
11 被験者の服装の良さ(経済的)							
12 身体的発育の程度							
13 知能程度							
14 社会的発育度							
15 家庭の経済状況							
16 親の教育態度							
17 家庭のしつけ							
18 自立性							
19 家庭での要求の受け入れられ方							
20 家庭内の雰囲気							
21 子供の適応							
評定不一致の被験者							

(注) ∞: .9以上, ∞: .8~.9, ∞∞: .7~.8, ∞: .6~.7, x: .6~.7, xx: .7~.8

8 実験者の質	9 ラポール 実験者との	10 被験者の身 なり清潔さ	11 被験者の服 装の良さ (経済的)	12 身度的發育 の程度	13 知能程度	14 社会的發育 の程度	15 家庭の經濟 状況	16 親の教育態 度	17 家庭のしつ け	18 自 立 性	19 家庭での要 求の入れ方	20 家庭内の雰 囲気	21 子供の適応	の被験者 評定不一致
					○	○						○	○	
					○○	○○						○○	○○	
												○○	○○	
														○
												○○		
														○○
/								○						
	/		○○	○○			○				○○			
		/	○○		○○	○	○○	○○	○○	○○	○○			
			/	○○	○○	○	○○	○○	○○		○○			
				/			○				○○			
					/	○○	○○				○	○○	○○	
						/	○○			○○		○○	○○	
							/	○○	○○	○	○○			
								/	○○		○			
									/				○	○
											/			
												/		
													/	○○
														/

xx—.8~—.9, xx—.9以下

第4図 評定項目の評定不一致の度合



### E. 評定者間の評定の一致度

今までは、観察場面、評定場面における幼児の行動に主眼がおかれ、評定者間(6~8人)相互の評定の一致不一致については、言及しなかった。評定者の評定結果は単純和の平均値でまとめてきたが、項目によっては、評定者間すべてが同様に等しく評定したものもあれば、ある項目では評定者間にまちまちの評定がされている。したがって厳密に考えれば、全評定者が一致して評定した項目と、そうでない項目とは結論の信頼性も、おのずと変わってくるものである。その両者を組合わせて問題の結論を引き出すことが、本当は正しいやり方であるが、なかなか困難である。ここでは、評定者間の評定の一致、不一致の度合を21個の評定項目について考察し、何らかの参考に供しようとするものである。

第4図は、各被験者ごとに各項目について、その評定値(評定者は6~8人)の標準偏差をまとめ、それを全被験者について平均したものである。各項目についてその大きさをグラフにすると第4図が得られる。

これは21個の評定項目について、全被験者を通じてみられる一般的な評

定の一致不一致度を表わすものである。

つぎに、各被験者について、全体的に一致した評定のできる被験者と、そうでない被験者とを知るために、各被験者のもつ各項目についての評定値標準偏差の項目間平均（前のは被験者間平均）を求め、その高い被験者から順位をつける。その順位と、各行動観察項目および評定項目との順位相関を求めたのが、第6表、第7表の最右欄である。

これらの図表より考えられる諸点を列挙すると以下の通りである。

a. (1) 室内での被験者の動作、発言量、実験者と被験者の接触の度合等、比較的、客観的にとらえられる項目は、観察評定者の不一致が少い。

(2) 被験者が実験者を意識するか否か、遊びに集中するか、遊びに統合性がみられるか、などの評定者が比較的解釈をまじえながら評定しなければならない項目は、評定者間の不一致が大きい。

(3) このような観察場面を通じて、被験者の家庭状況等を推測することは不可能に近い。第4図では、比較的評定者間の不一致の度合は少いが、これは評定の容易さを示すものではない。評定しにくい項目は多くの評定者が一様に中位のところに評定する傾向があるからである。このような項目の評定は、各項目内の評定結果が分化していないことから裏づけられる。第7表によると、評定項目10から21までのなかに有意な順位相関を示すものが多い。このことは、その被験者の何か特徴的な印象をもとにして、どの項目にも評定をする結果であって、各項目をそれぞれ別々に評定する力がないことを示すものである。

b. 評定者間の不一致の度合と被験者の行動との間の関係をみると、遊具使用時間と、統合、未統合の時間、統合度の大きさには有意な関連性がみられる。すなわち遊具の使用時間、統合を示した時間の長いもの、また未統合時間の短いもの、統合度の高いものほど、その被験者の一般的評定に不一致が多くみられる。このことは評定の不一致の高いことはそれだけ被験者の行動が多様な面から判断されるために起ってくるものと解釈される。もし被験者の行動が、いろいろな面で表現され、その結果、その幼児の特

性を種々の角度から、検討するために各評定者間の不一致がみられるとすれば逆説的ないい方ではあるが、その方がかえって幼児の理解には役立つものである。それには遊具は多くの時間使用された方が好ましく、統合度の高い行動が示された方がよいと結論される。

以上の結果から、観察評定にはいくつかの問題が残されていることが分った。第一に評定者の評定し易い行動項目を考えてみたとき、比較的客観的にありのままに記述出来るような行動については、評定者間の一致は高く、ある程度解釈を必要とする評定項目では、評定者間の一致は低かった。また、明確に評定することの困難な項目については、各評定者が一様に中程の評定をするためにかえって評定者の一致は高くなるが、このことは必ずしも、評定の妥当性を保証するものとはならなかった。

第二に被験者の特徴ないし行動傾向と評定者の評定傾向との間に起る問題がある。一般に活発で発言量も多く、実験者との接触の多い被験者は、それだけ良い評価を与えられる傾向があり、発言が少なく、実験者との接触も少なく、一人で遊具と遊ぶ傾向のあるものは、悪い評価を与えられる傾向のあることがみられた。このことは行動の観察評定において、評定者のもち易い判断の歪みとして、注意しなければならない問題である、

#### IV ま と め

最近、幼児の行動研究や遊戯療法でさかんに用いられている doll play が、他の遊具に比してどのような特徴的行動をひき出すか、一つの実験的場面を構成してそこでの幼児の言語、動作を量的にとらえる試みを行った。これは、幼児の遊戯行動の質的、臨床的観察の前段階として客観的な観察基準を立てるためであり、その基準にてらして、主観的な行動評定法の妥当性、信頼性も検討された。

実験にあたっては、都下の私立保育園の園児 8 名を選び、1 名 1 回正味 20 分の一方透視窓を利用した行動観察が行われた。実験者は 1 名、観察記録者は毎回 6～8 名でこれにタイム・キーパー 1 名が加わった。doll および house は他大学・研究所と共通のものを用い、他の遊具には予備観察



の結果より積木、絵（画用紙、クレヨン）、粘土などを選んだ。観察記録は、1) 用いられた遊具の種類、2) 行動の内容、3) 行動の種類、4) 実験者からの働きかけ、5) その他 の観点からなされた。これらのデータが相関にかけられ、また 1) 室内での被験者の様子、2) 実験者の様子、3) 幼児の行動より推測される家庭状況についての5段階評定が行われ、客観的資料との相関、評定者間の一致度が検討された。

その結果は、

1. 遊具選択場面での幼児の行動には、個人差が大きいため一般的結論は導き出し難い。しかし doll play についていえば、他の3つの遊具に比べて、比較的興味をもたれ易く、早くから選ばれ、言語表出の機会の多いことが見出された。したがって doll play を用いて幼児の行動を観察すること、または幼児の行動に働きかけることは、充分意義のあることと考えられた。
2. 各遊具への移行回数の多いこどもは、遊びの内容において未統合であるが、言語表出や、実験者との相互作用度は高い。したがって一つだけの遊具でなしに、いくつかの遊具を用意することによって幼児の activity を高めることが可能と思われる。
3. 幼児の言語表出や相互作用は、実験者の働きかけの如何にかかわらず、起きてくるもので、絵のばあいを除いて実験者の非指示的な態度が一応遊戯状況を支えるのに成功したといえる。
4. 行動観察の客観的資料と行動・態度評定の結果との検討によって、言語表出度、相互作用など観察記録された行動の index は、主観的な評定結果と高い相関をもつことが示された。しかし、このような index が、幼児の知能や社会的発育度、家庭内の状況までを適切に推測するのに役立つとは考えられない。
5. それは、一般に活潑で発言量も多く、実験者との接触の多い被験者が、それだけ、良い評価をうける傾向があるからであり、各評定者間において高い一致を見た項目といえども、客観的事実を裏書きするものでなく、か

えて評定の困難を示すもの（したがって尺度の中ほどにおいて一致）だからである。

結局、今回の研究から得られたことは、まことに僅かで、かつ今後の検討にまつべき問題の少なくないことが示された。また、遊戯場面の行動と、幼児の先行経験（家庭や保育園における）との関係、観察技術、評定技術の問題など追求すべきことが残されている。しかしこの種の試みを積み重ねることによって、doll play の使用についての妥当性が高められるものとする。（星野一本学助教授，古畑（和）一本学非常勤講師，池田・古畑（と）一本学非常勤助手，佐伯・古沢一本学大学院学生）

#### 参 考 文 献

- (1) Bell, J. E., *Projective Techniques*, New York: Longmans Green, 1948, Part IV, Chapt. XXII.
- (2) Dunlap, J. W. & Kurtz, A. K., *Handbook of Statistical Monographs, tables and formulas*, New York: World Book, 1932
- (3) 林知己夫他，統計数値表の使い方，東京：朝倉書店，1955
- (4) Lebo, D., "A formula for selecting toys for non-directive play therapy" *J. gen. Psychol.*, 1958, 92: 23—33
- (5) Levy, D. M., Experiments in sibling rivalry, (in) Barker, R. G., Kounin, J. S., & Wright, H. F. (Eds.) *Child Behavior and Development*, New York: McGraw-Hill, 1943, Chapt. XXIII
- (6) Philips, R., "Doll play as a function of the realism of the materials and the length of the experimental session." *Child Development*, 1945, 16: 123—143
- (7) セザリ，ポール（周郷博訳），児童心理学，クセジュ文庫，東京：白水社，1954，第2章
- (8) Siegel, S., *Nonparametric Statistics*, New York: McGraw-Hill, 1956
- (9) Walker, H. M., & Lev, J., *Statistical Inference*, New York: Henry Holt, 1953
- (10) Watson, R. I. (Ed.), *Readings in the Clinical Methods of Psychology*, New York: Harper, 1949, Part III.
- (11) 依田新他，"Doll play technique に関する文献的研究" 教育心理学研究，1959, 7: 45—60

## A Study on Play Behavior of Children with Dolls and Other Play-tools

(English Résumé)

Akira Hoshino, Kazutaka Furuhata, Hiroshi Ikeda,  
Tomoko Furuhata, Tsutomu Saeki, and Atsuko Furusawa

It has been widely recognized that the use of family dolls is quite helpful in child psychotherapy and child research. Children, in doll play, objectify many of their problems, express forbidden wishes and impulses, and bring about the solution they need and want.

Although applied chiefly to work with children for therapeutic as well as diagnostic purposes, a few experiments have been done in Japan with normal children.

The present study is chiefly concerned with problems as follows: a) to what extent can dolls and a doll house stimulate (or attract) children to produce thematic and measurable behaviors as compared with other play-tools such as blocks, clay and painting? b) is there any significant correlations among the different indices observed? c) is there any significant agreement among observers who make ratings on each child and play situations? d) can these ratings based on behavior observation be valid and reliable against the facts of each child and of his family backgrounds?

To cope with these problems, a series of experiments have been undertaken with eight kindergarten children (4 boys and 4 girls, ages: from 5 years 4 months to 6 years 1 month). Each child was introduced into the play-room of the university psychology laboratory, where the child was allowed to play with any of four kinds of play-tools he (or she) wished without "directive" instructions of the experimenter. Observation was made through

one-way mirror by six or eight observers for 20 minutes for each child, in terms of 1) kinds of play tools chosen by the child 2) nature of his (or her) behavior 3) the degree of verbal and non-verbal expression of the child 4) and interaction between the child and the experimenter. Ratings\* were separately made by each observer immediately after the observation was completed, in the points of the child's activity level, his sociability, precautiousness for the experimenter, the degree of concentration, the experimenter's rapport with the child, the child's independency and adjustment, and so on.

Analysis of accumulated data reveals some results to be noted. 1) Although it is difficult to make a generalization with only eight subjects, dolls and a doll house tend to stimulate children's verbal behavior more than the other tools in spite of the fact that they did not necessarily produce more thematic or integrated behavior. 2) This stimulus value has been accelerated in the case of children who chose the various play-tools including dolls, for the verbal expression and interaction with the experimenter has been increased. 3) There are high correlations between the observation data and the observers' ratings, but the indicies that every rater comes to agreement do not necessarily validate the ratings against the facts. The agreement indicates only difficulties in rating. There are no significant correlations shown between subjective ratings on the children's intelligence, social maturity and family backgrounds, and the facts concerned with each item.

This study leaves many problems unsolved such as criteria for objective observation and subjective ratings, and the relationships between the children's behavior in the play-room and that of daily life situations. But it is the authors' feeling that this kind of experiment could give a basis for the validity of the use of doll play in child research.